

平和作文集

「世界平和のために  
私ができること」

小金井市

## はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和市長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないためにも、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、3月10日を「小金井平和の日」として制定しました。

この文集は、戦後から長い年月を経て戦争の悲惨さが語り継がれる機会も少なくなっている中、小金井市民憲章の理念に基づき、平和を願い、命の尊さについて改めて考える機会とするため、平和事業の一環として実施した「世界平和のために私ができること」をテーマとする作文コンクールの応募作の中から7編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にさせていただければ幸いです。

平成27年3月

企画財政部広報秘書課

# 目 次

## 【入賞作文】

### 特別賞

箱井 悠理（小金井市立緑中学校 3年生）・・・・・・・・・・ 1

### 大人の部 大賞

竹内 富二枝（80歳代）・・・・・・・・・・ 3

### 中学生の部 大賞

櫻井 美穂（小金井市立東中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 5

### 小学生以下の部 大賞

青木 亮太郎（小金井市立小金井第四小学校 4年生）・・・・・・・・・・ 7

## 【優秀作文】

上原 智江子（50歳代）・・・・・・・・・・ 8

庄内 月（小金井市立東中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 10

長谷川 日和（小金井市立南小学校 4年生）・・・・・・・・・・ 11

## 特 別 賞

箱井 悠理（小金井市立緑中学校 3年生）

平和って何だろう。あまりにも漠然として抽象的な言葉なので、私自身にひきよせて考えてみた。今、私は幸せである。なぜなら、頼れる家族に守られ、衣食住に心配がなく、成熟した大人に成長するための時間とカリキュラムをたっぷりと与えられ……そしてこんな平穏な日が、明日も明後日も変わらず続いてゆくと思える安心感があるからだ。このような安心感が得られる状態を、平和というのではないだろうか。つきつめて言うならば、平和とは、私たちの大切なもの、つまり生命や人権を理不尽に脅かされたり、踏みにじられたりしない状態のことなのだと思う。それは、平和の対義語が戦争であることを考えれば、容易に納得できる。

私は平和な社会で暮らしているがゆえに、その幸せを当然のものと感じてしまっているように思う。普段、平和について考えることがあまりないし、本や新聞を通して知る、世界のあちらこちらで起こっている平和とは程遠い状況を、痛ましく思っても、どこか他人事のような感覚で受けとめているのだ。そんな私にとって、昨年ノーベル平和賞を受賞したパキスタンの少女マラさんの行動は、とても衝撃的だった。私と同年代の少女が、女性や子供の権利のために、ひいては世界の平和のために命を懸けて戦っている。理不尽な現状を打破しようとする彼女の、平和への意識の高さと、深い考察に触れ、本当は平和とは、模索して手に入れ、心して守らなければいけない繊細なものなのかも知れないと思うようになった。そして、自分が世界の平和を語るには、あまりにも無知だと感じたのである。

そんな私が世界平和のためにできることは、まず知ることなのではないかと思う。平和を壊すものは何なのか。飢餓・差別・貧困・紛争・病気など負の現象の根本にある原因は何なのか。そこを知らないでは、対策もたてられない。その際一番恐れるべきことは、浅薄で偏向した知識をもって、わかっている気になってしまうことである。他人からの受け売りや、確信のない情報に惑わされずに、物事を深く、正しく理解するためには、たくさんのお話を学ぶしかない。歴史であったり、自然科学であったり、政治経済であったり、宗教であったり、とにかく知識という力を蓄えることが大切なのだと思う。

う。このことは、マララさんが、より良い社会を目指すために、誰もが教育を受けることができる権利を求めたことにも重なる。もう一つ大切なことは、自分とは異質なものを認め、受容する包容力を身につけることだ。世界平和を脅かす最大の要因は、国家や民族間の対立・紛争にあると思う。相手の背景に対する知識をたよりに、わが身に置きかえる想像力と、そこから生まれる共感力をもってすれば、歩み寄り、共存する道が開かれるはずなのだから。そして、これらのことは、まずは自由に学び、考えを持ち、意見をすることが可能な立場にある私たちこそが、始めなくてはならないと思うのだ。

世界平和という言葉はあまりにも壮大すぎて、現実味がなく、夢の話と一笑に付されることもあるだろう。平和のためと謳って、軍事費用が増えることへの矛盾に打ちのめされたり、世界中にある諸問題の平和的解決が、遅々として進まない現状に失望もするだろう。でも、あきらめずに声を上げ続けることが大切だと思う。戦争のない世界。貧困のない世界。差別のない世界。すぐには無理でも、多くの人が同じ夢を語れば、少しずつ変れる気がする。作家である魯迅が、「故郷」というお話の中で、「希望」とは地上の道のようなものだと語っている。「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」と。皆が求めることで、世界平和という人類の大きな希望の道は、開かれてゆくのではないだろうか。

## 大人の部 大賞

竹内 富二枝（80歳代）

他人の不幸の上に、自分の幸福はあり得ないとある賢人が云った。

昭和十六年十二月八日、軍国日本滅亡のきっかけとなる太平洋戦争が始まった。当時私は小学三年生、自分が何をしていたかさえ、全く記憶にない。しかし、この日を境いにだろろう家族の誰もが急に忙がしくなり、私への関心が薄れていく気がしたのは確かである。

学校生活も同様に、面倒見のよかった優しい担任も、生徒の理解の有無にかかわらず、強引に、鬼畜アメリカ、神国日本を子供達にたたき込むという変貌ぶりであった。

見えない、聞こえない、云えない教育程おそろしいものはない。だが無知蒙昧な幼ない脳は、反面、インプットは早くて確実である。私の脳細胞が、戦う勇気と、我慢する根気と、相手を負かす歓喜に躍動するまで、さほどの日数はかからなかった。

今思えば、馬鹿ばかしい竹槍訓練や、バケツリレーでの消火訓練も、云われるまま従った。

又、年毎に進む食糧難の中、米飯が芋飯に変わり、副菜には、いなご、たにし、道端の雑草を口に、腹の足しにしても、少しもつらくなかった。生存する戦中派は、当時の心境を異口同音に、今もそう語る。

人生には、時として予期せぬ悲しみが突然訪れると聞いたことがあるが、まさにその時がやってきた。

昭和二十年八月十五日、旧制高女一年生だった私は、この日、いつも食糧を援助してくれる叔母の家に行き、帰宅したのは正午を過ぎていた。もらった米、芋の重さと空腹感で我が家の前で一度大きな息をつき、ふっと庭先を見た瞬間、異様な場面に一瞬たじろいだ。

さほど広くもない庭先で、隣組の人達が互いに手を取り合い、抱き合い、或る人は地面を叩きながら泣きわめいている。「父ちゃんは犬死にやった」「息子を返して」「兄ちゃんは帰れるやろうか」「敵兵に殺される前に私は死ぬ」等々の叫び声をつなぎ合わせて、やっと私は、今日、全面降伏の玉音放送があったことを知った「なぜ、どうして、あんなに信じていたのに」と私

の胸もどうしようもなく張り裂け、「いやあー」と大声で叫び、地面を叩きながら泣きに泣いた。

あの日のくやし涙を私は決して忘れない。

戦後七〇年。今マスコミからは、次々と戦争の経緯、戦時中の庶民の暮らしの実態が報道される。だが全国民の生命を返せ、人権を返せ、との叫びは、世界のどこまで届いているだろう。今なお世界のどこかで戦争や、いさかいが続いている。見えるのは、自己主義で多角的に複雑に絡まり合った糸のような世界情勢ばかり。果して人類の平和は、本当にやってくるだろうか。

先頃某紙で、昨年十二月、あの「ローマは一日にしてならず」で有名な、イタリアの首都ローマで開催された「第十四回ノーベル平和賞受賞者世界サミット」の記事を読んだ。

要旨は、この催しには、歴代のノーベル平和賞受賞者が集い、人権・人類的課題、を解決するための提言、議論を行うものである。今回は、講演・パネルディスカッション等、七回のセッションがあり、世界青年代表団との意見交換も行われた。

その中で、日本青年代表団の一員として参加した、足立真優さんが、フィンランドの平和活動家、マイレット・コリガン・マグウィア氏に「平和実現のため、過去から学ぶ負の遺産をどの様に未来に伝えるべきか」と質問、氏は「目先のことに一喜一憂せず、心ある先人が残した平和への思いを学び、平和と云う人類の悲願を語り伝えて欲しい」と答えた……と。記事を読み、私は、先ず、心ある世界中の青年が、平和について、研鑽し、国を越え、思想信条を越え、手をつなぎ合い、行動の輪を拓けていることに感動した。又、マグウィア氏の「平和への思いを語りつぐ活動を」とのことばに、これなら私にもできると、大きな勇気を頂いた気がした。

幸い小金井は、各種の市民活動の場を企画している。その中に「友愛活動」と云う集いがあり、私も時折参加して、友の幸せ作りを楽しく交換させて頂いている。集まる人は殆どが戦中派であり、戦時中の体験に花が咲くことも多い。環境により、体験も様々だが奥底にある平和への願いは皆同じである。

今後はこうした体験を、身近な子や孫に、又、戦争を知らない近隣の人達に、もっともっと伝えていきたい。それが私ができる世界平和への貢献だと強く感じている今日この頃である。

## 中学生の部 大賞

櫻井 美穂（小金井市立東中学校 2年生）

ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんを知っていますか。彼女はすべての子どもが教育を受けられ、男女平等となるように世界に訴えかけています。彼女は現在十七歳で私と三歳しか違わないのにもかかわらず武装勢力に立ち向かっているのです。そしてマララさんは何度か銃撃を受けました。けれど彼女は屈しません。そんな彼女を私はカッコいいなと思いました。

私たちの国日本は戦争をしないと決めたため戦争や紛争もなく平和な国です。そして私たちは日々平和に過ごしています。けれどある国の子どもは、戦争・紛争のせいで学校に通えないどころか、戦争や紛争に巻き込まれ、銃を持たされ戦争や紛争に参加させられ命を落としている子供もいます。

私が学校で新しい公式を習っているとき、ある国の子どもは銃の使い方を習っています。私が体育の授業で汗を流しているとき、ある国の子どもは戦場で汗や血、涙を流しています。

今の私は世界平和のため、教育を受けられない子どもたちのために何ができるのでしょうか。私はまだ中学生。貧しい国などへ行って支援活動することはできません。直接的な支援は何一つできないのが現実です。けれど間接的な支援なら、私にもできるのではないのでしょうか。膨大な金額の募金はできないけれどある程度の人募金をしてお金が集まれば学校だってたてられます。ほかにペットボトルのふたを集め協会などに送ればワクチンなどに変えられます。ペットボトルのふたを集めるだけでどこかの国の誰かの命を救うことができます。募金などは頻繁にできることではないですがペットボトルのふたを集めることはだれでも簡単にできることです。

世界平和は、私だけで解決できるような安易な問題ではありません。世界平和のためには、まず私たちが世界を知ることが大事なのではないのでしょうか。どの国でどのような戦争や紛争が起こっているのか。それは何が原因なのか。たくさんの方が世界のことを「知る」ことが世界平和の第一歩なのではないのでしょうか。私はこれを機会に大使館などを訪ねてみようかなと思います。世界のことを知ればもっと視野は広がると思います。



私は平和な国日本、に生まれ戦争の恐ろしさなど何も知らず今まで生きてきました。今の私には、戦争や紛争を止めさせることもできなければ、貧しい国を豊かにすることもできません。なので将来私は貧しい国などへ行って支援活動をしたり、学校建設の募金を呼びかける活動などをしたいと思っています。世界平和と口先だけでなく一歩踏み出してみることが大切なのではないでしょうか。これが世界平和のために私ができることです。

## 小学生以下の部 大賞

青木 亮太郎（小金井市立小金井第四小学校 4年生）

ある日の夜、ぼくはとてもこわかった。なぜか、夜になるとむさし小金井のビル郡が火の海に見えてしまう。ぼくは、太平洋戦争の事を少々知り始めて来ている。それでねむる事が出来ない日もあった。戦争はしてはいけないと思う。しかし、四年間続いた戦争の事が記おくからうすれていく中、それは覚えてよい事なのか、残らない方がよいのか分からない。原ばくドームのある広島県議会でも、ぼくと同じようなとうろんがあったそうだ。そのとうろんは原ばくドームを残すかについてだった。当時ほう落の進んでいた原ばくドームは、「戦争体験者、そしてそれ以外の人々に心のきずがついてしまう戦争いこうだ」という意見と、「わすれてはいけないあの戦争のこわさを伝える物である」という意見があった。そしてぼくは昨年、もっと戦争について知った。広島へ行ったり、たまたま、テレビでやっていたり。また八月十五日の甲子園でサイレンと共に手を合わせた。そして、八月十四日空しゅうがあった所がある事を知った。

ぼくは平和のために、このことわざを考えた。“<sup>きのう</sup>昨日の友はずっと友”だ。世界でそうなればと思う。ぼくは、昭和二十年八月十五日のあの日の天のうへい下の声を聞いたら戦争に負たくやさしさよりも平和になった事のほうが大きいかもしれない。ぼくも、戦後五年の日本のように、力強く、明るく平和にくらしたい。

未来はぼくたちが創る。平和で明るい未来を。ぼくの目にはもう見える光りかがやく地球が。その中は、青い鳥とはとでうめつくされている。そして、平和のついた地名、名前が多くなる事を願って未来に進んでいきたい。

昨年は、戦争はやってはいけないと思うことができたり、戦争について“知った。”命のにぎり飯というお話のおぼうさんも言っていた「あらそわぬ者は必ず良い事がある」と。図書室にこんな題の本があった「ダイヤモンドよりも平和がほしい」だ。世界中の人々が平和を願っている。地球という島にかくされた宝は「平和・明るい未来」だ。ぼく達がそれをとりに、発見しに今からいく。平和とはなにか。それは、まさに地球上の“最高宝”だ。

桜の頃までもってけると良いね…

母の命の時間を示す主治医の言葉だ。

予期せぬその言葉に、私は一瞬頭の中が真っ白になった。

いつの世も、大切な存在を亡くす悲しさは同じはずである。

にもかかわらず、戦争と云う名の下に最愛の息子を戦地へ送り出し、突然の帰らぬ報せに人知れず無念の涙を流した母親がどれ程いたことか。

桜の如く散ったその命を現実には受け入れられなかったのではなからうかと、その時の私は想像に易かった。

そんな物語と重ね合わせて、いつ逝くとも知れぬ母に残されたその日を、一日も欠かす事なく私は見舞った。それはまるで願いを託すお百度参りの体を為していたのである。

ある日、見舞いを終え、自宅で遅い昼食を摂りながらふとテレビドラマに目をやると、はるか昔、まだ元気な頃の両親と共に見た記憶のその画面が私の目に飛び込んできた。

息子が戦地へ赴く前夜、おそらく最後になるであろう家族揃っての祝いの膳。

その万感の思いを胸に受け、愛する家族が生きるこの国を命を賭して守ると旅立つ息子。

残された家族は空襲に怯えながら互いの無事を祈り、食料困難のなか一本のサツマイモを分け合うといった、食べる事にも必死な毎日である。

そして戦火を生き延びた母の元へ届いた一通の悲しい報せ。

運命に弄ばれるように、その翌日終戦を迎えた物語だが、母親のやり場のないその空しさは、観る者に強烈に印象に残った。

いまの時代を生きながら、親を亡くす瞬間が迫っていた当時の私には、その時の心象風景が少なからずシンクロして心に深く響いたのである。

『戦争は駄目だ』と口で言うのは簡単であるが、では何故駄目なのかというと今の感覚では答えを出すのは難しい。

そもそも戦争は人の争いである。

人の争いであるならば、人の知恵と努力によってそれを回避出来るのではなからうか？

平和を考える時、人はいつも戦争が起きた原因を考えがちだが、争いの種など数えきれないほど存在する。

しかし、戦争で起きた悲惨な現実はどれも一様であり、その悲惨さに触れる事の方が強烈に、そして瞬時に印象に刻まれる。

そこから学び、同じ過ちを二度と繰り返したくないのだと感じる強い思いを持つ事の方が、平和への近道ではないだろうか。

平和とは、穏やかな心の状態を保てる環境を指すのだと思う。

人はどんなに満たされようと、願いが叶った時点でまた新たな欲望や次の心配事を見つけてしまう。今の幸せに気付く事を怠り、もはや悩みの無い人など皆無である。

便利になり過ぎた今、ネットの書き込みに一喜一憂し、必要以上に主張する事が容易である反面、その即効性ゆえ自分を省みる理性と時間が減少してしまっているのではなかろうか。

忘れがちだが、もともと日本には自己主張を控えるべき場というものが存在する。外国にはまず無い場面であろう。それもある意味、人を思い遣る古き良き心の現れではないだろうか。

そんな暖かい心を持ち、平凡で当たり前の毎日続けることこそ実は難しく、また尊く幸せなのだと思う。

過去と他人は変えられないが、自分と未来ならば変えられるはずである。

身勝手な利益だけを考え、無責任に自由を主張してしまう昨今、むき出しの感情がどれほど人を傷つけるか、行動を起こす前に時間をかけて考えるべきである。

暖かい思いをもって助け合う日常が構築できれば、まずは自分の足元からではあるが、平和が実現できるのではないだろうか。

何よりも忘れてはいけない。

平和は努力の上に成り立ち、ましてや当たり前の幸せなど無いということ。

幸せを犠牲にした悲惨な戦争の事実を忘れることなく、平和について考える時間を与えてくれたこの機会に、私は感謝する。

自ら今、平和のありがたさを忘れぬよう、ここに記す。

私は今回の「世界平和のために私ができること」というテーマで「人の心」について考えることにしました。

日本は戦争をしない国なので、私たちは今安心して暮らす事ができます。でもそうでない人々は世界にはたくさんいます。関係のない子どもが戦争で狙われたり、差別をされたり、学校に行けず働いたり、世界にはいろんな子どもがいます。

私が今回このテーマについて考えたのには理由があります。ある写真がネット上で話題になっていました。それは白人の警官と泣いている黒人の子どもがハグしている写真でした。黒人の彼は、私たちとほとんど変らない年齢でした。彼は黒人に生まれ小さい頃に親から虐待をうけていました。そしてこの時は差別反対のデモに参加していて、彼は「Free hug!!」という看板を持っていたそうです。そしてデモを止めに来た白人の警官がきました。その中、一人の白人の警官は、彼の日常について聞いたりして、最後には、看板を見て「私もハグしていいか。」と聞き、彼は泣きながらハグをしたそうです。私は彼のデモに参加する勇気、そして警官の温かい心に感動しました。

私たちが世界の平和のためにできること、私は少ないと思います。しっかりしなくてはならない大人の一言で戦争をしてしまったり、戦争となると人々の幸せよりも国の幸せを選んでしまったり、子どもが幸せに過ごせる学校よりも、人を傷つけることしかできない核兵器をつくったり。それだけでなく、意味のない差別をしたりと、不公平な世界です。でも私はこの出来事を知ったとき、それを一人一人が自覚したら世界は少しずつ変わるんではないかと思いました。警官一人の温かい心が彼の傷を癒やしたように、一人でも救えるものがあるということがわかりました。私たち一人一人ができることはきっとほんのわずかです。でも警官がもっていた温かい心をもつ事はきっと誰でもできることだと思います。一人でも多くの方が温かい心をもつことで、彼のような子どもを救えたり、もしかしたら人を傷つけようとする人が減るかもしれません。小さいことかと思うかもしれませんが、「温かい心」をもつ、それが唯一私たちができることだと私は思います。

私は大切な命を持つ人間です。あなたも大切な命を持つ人間です。外国の方々も大切な命を持つ人間です。私は思いました。みんなみんな同じ大切な命を持つ人間なんだと。

私は最近まで「この子は好き。でも、この子はきれい。」と人を差別をしていました。でも、これはただ、私の思いこみ。本当は、みんな一つの輪になっている。しかし、みんながみんな一つの輪の中に入っているわけじゃない。その輪の中に入っていない人が戦争・いじめ・国や人を差別する人なのです。あなたは、みんなで作った一つの輪の中に入っていますか。私は最近まで入っていませんでしたが、命の大切さなどに気付くと輪の中に入れました。その時はとってもうれしかったです。命の大切さで私が思った事を少し紹介します。「私の命一つでも、空へ上ってしまうと、みんなが悲しむ。でも反対に私の命がとっても元気で今から百年間続く命を持っていれば、みんなが笑顔になるはず。だから、これからも一日、一日を大切にしてみんなを笑顔にさせてあげよう。」と思いました。

このように、自分のことだけではなく、相手のことも考えるようにしました。それでもいじめや戦争をしたいと考える人はこの一言だけ覚えて下さい。「あなたの命、あの人の命。」相手が傷付くことをする前に少しでいいので、この言葉を頭の中で何度も繰り返してみして下さい。何かが分かるはずですよ。そしたら、自分が今やろうとした事に意味がないと分かると思います。

今、私が出来る事は少ないけど少しずつ出来る事を増やして行きたいです。

私のおばあちゃんは実際に戦争を体験した人です。少し話を聞いてみると、とっても怖く悲しかったそうです。やっぱり人間は人間らしく、思いっきり泣いたり笑った方がいいと思います。

私は、今でも戦争の事や自分が今までにやってきたわるい行いを思い出すと、とってもくやしくて、泣きたい気持ちになります。だから、みなさんもとっても小さい事でもいいので「今、自分が出来る事」をやって世界の一つの輪を作りましょう。

## 平和作文集

発行 平成27年3月7日  
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係  
小金井市本町六丁目6番3号  
☎042-387-9818